

れないであろう」(ベルクソン『創造的進化』一九〇七年、真方敬道訳)

ここでは「知性」と「直観」という概念を設定し、「直観」に仮託するかたちで生命のあり方を語らせている。

このように、根源的なものとしての生命は、つねに何かに仮託することによってしか語ることでできないものなのである。かつて鈴木大拙はそれを「靈性」という言葉に仮託した。一般的には「魂」とか「靈」という言葉に仮託されることもある。「遺伝子」もそれが生命を仮託したものであるなら正当に受けとめてもよかつたのだが、自然科学者たちは「遺伝子」を仮託ではなく生命を司る実体としてとらえたために、泥沼に陥つたように私にはみえる。

## 六

もつともミクロな歴史である個人史をみても、そこには大量の「みえない歴史」が存在しているのである。それは人間の存在の根本にかかわることと、意識されていない知

性の記憶、身体の記憶、生命の記憶というようなものは、私たちの「現在の知性」の及ばないところにある。さらに、もしも生命の記憶のなかにはかつてユングが述べたように、生まれてから以降の経験した歴史だけではなく、生命を受け継いできた「人類史」、「生物史」の記憶までが無意識の集合意識として潜んでいるとするなら、「みえない歴史」はさらに深淵で広大な世界を形成していることになる。

私たちはこのような歴史世界のなかに存在しているのである。ところが知性によって語られた歴史だけが歴史であるように思える、現象的な精神世界のなかで暮らしている。とすると、全体としての自分の存在と、知性によってつかみとられた現象としての自分の存在の間には、大きな乖離が生じているということになる。

そして、この乖離こそが今日の私たちの状況をつくりだしているような気がする。

近代の思想は人間の知性に絶対的な信頼をよせた。いまその象徴的な哲学として、十七世紀に書かれたデカルトの『方法叙説』をあげるとは容易であるし、前記した「百科全書」派の人々もこの傾向を代表している。もつともそのことに対しては、十九世紀に入ると、ショーペンハウエルたちのロマン派からの抵抗が生まれるし、二十世紀に入れば哲学の世界ではこの動きはますます大きくなっていく。だがそのような反撃があつ

たとしても、全体的にみれば、知性への信頼は確固としたものとして存在していた。

そのことが歴史を發達史として描かせた大きな要素だったのではないかと思う。知性は現在の問題意識に依りながら、歴史はどのように形成されてきたのかを知ろうとする。どのような原因があり、どのようなプロセスを経てその時代は形成されてきたのかを合理的に知ろうとするのである。發生史的な、あるいは發達史的な歴史の把握の誕生である。しかもこのような歴史観が成立していく背景には、發展していくヨーロッパという近代ヨーロッパの人々の実感に裏付けられた「思い込み」があった。

歴史を發展法則のなかでとらえようとしたヘーゲルやマルクスの歴史哲学が成立してくる基盤も、このことの中なかにあったといってもよいだろう。こうして現在の問題意識を介して、知性によってとらえられた歴史がゆるぎない歴史としての位置を確立していった。

今日の私たちはこの歴史の世界にまきこまれていく。だから、たえず發達史的な歴史を求め、知性でとらえられるかぎりの發達史的な歴史を、である。

そして、知性でとらえられた發達史的な歴史はひとつづつ實現していったというのに、私たちは何となく充足感をもっていない。このことに対して「物質的な豊かさから心の豊かさへ」などと言う人がいるけれど、問題はそんなに簡単ではない。なぜなら發達史的な歴史のなかで實現されたものは、けっして「物質的な豊かさ」にとどまらないからである。

私たちは気軽に旅に出られるようになった。その気になれば世界中の情報を集めることもできる。言論や出版、思想などの自由もほとんどが實現している。教育の機会は満ちあふれ、政治に対する選挙制度なども確立している。街は人にあふれ「自由な市民社会」を人々は享受している。もちろんそういうすべてのことが、深く探れば何らかの問題をかかえているけれど、知性がみつけた発達した社会のイメージは、そのほとんどが實現しているといっても私は構わないと思う。實現したのは「物質的な豊かさ」だけではない。

ところが、にもかかわらず充足感に乏しい。一体何が乏しいのか。身体の充足感。生命の充足感。現在の問題意識から切断されているがゆえに「みえなくなつた知性」の充足感。

知性を介してしかとらえられない世界に暮らしているがゆえに、ここから見えなくなつた広大な世界のなかにいる自分が充足感のなさを訴える。それが今日の私たちの状況

であろう。そして、だからこそ、この充足感のなさを「心の豊かさへ」などと再び知性の領域で語ってみても、何の解決にもならないだろう。

## 七

さて、もう一度「歴史」に戻ろう。私たちが歴史としてとらえてきたものは、知性によつて物語られたほんの一部分の歴史にすぎない。そのまわりには、広大な「みえない歴史」が存在している。とするとこの「みえない歴史」はつかむことができないのだろうか。

私はつかむことができないとは思っていない。知性を介しては、より厳密に言えば現在の問題意識と結ばれている知性を介しては、つかむことができないのである。それは非知性の領域においてしか、つかむことができない。

おそらくこういうことであろう。私たちには合理的な説明はできないけれど「わかる」「こと、「納得できる」こと、「諒解できる」ことなどがある。知性では説明できない

のに、自分の身体や生命はつかんでいるのである。身体の記憶や生命の記憶に照らしたとき、それはよく「わかる」ものとして現われる。

すでに引用したように、ベルクソンは「直観は精神そのものだ、ある意味で生命そのものだ」と書いた。「知性からはけつして直観に移れないであろう」とも。

それは、知性を介さずに「わかる」ものの現われ方のひとつだといってもよい。私たちは直観というかたちでものごとを「つかん」たり、判断したりすることがあるけれど、身体や生命による認識や判断は知性を介さないがゆえに、私たちには直観というかたちで現われる。ベルクソンが述べるように、知性から直観は生まれえないし、直観は生命そのものから生まれてくる。

私は非知性的な認識や判断をすべて直観と結びつけることはできないと考えているが、私が問題にしているのは、この領域に展開してきた歴史である。

ところで、すでに述べたように、知性による歴史の認識は歴史に合理性を求め、何らかの因果関係によつて歴史は形成されてきた、その意味で歴史は発展してきたとさえさせる。時間に発展を要求するといってもよい。つねに時間は直線的に過ぎ去つていて、その過ぎ去る時間のなかに合理的な因果関係が内蔵されているという感覚。それ